
東京 2044

mimi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京2044

【Nコード】

N0409Z

【作者名】

mimi

【あらすじ】

2044年、日本の国家権力はますます弱くなってきている。そのせいで国が公務員を十分に雇う力を失い、警察やその他の公共機関もかなり弱体化していた。

かわりに力を持ち出しているのは、金をたんまりと持った“企業”だ。世界には、企業国家と暗に言われる国が増えていたが、日本もそんな国の一つだった。

そんな2044年の東京の寒空の下、特殊な環境で幼少期から共に過ごしてきたセナと令人は、探偵まがいの仕事関連で容姿端麗な泥

棒を追う事となるのだが：

BLUE

2044年、トーキョー。

古びた高層マンションの最上階。

冷たい感じのするその部屋は、夜が訪れる直前のブルーに包まれて、更に冷たさを増していた。

「セナ」

ベットのの中の男に名を呼ばれ、紺とグレーのまだら模様の空を、ぼんやりと見つめていた少女が振り向く。

空の色も映しそうなほど白い肌。ふわりとした黒い髪。人形のように黒目がちな目。

寒いだろ、男はそう声をかけようとしたが、はっとしてやめた。

天使のような外見に、考えている事を悟らせないような小悪魔な内面が魅力の彼女だったが、今はいつもとどうも様子が違う。

男を見つめるその目は、悲しみに沈んでいた。

それも、感情的なものというよりは、諦めといったほうがしっくりくるような具合だ。

男がその意味を計り損ねていると、ドアの外でバタバタと誰かが走る音が聞こえた。

不吉な予感を、男は理論的な思考で打ち消そうとする。

そんな筈はない、咲は今日は旅行の筈だ、ここにいるはずはない。

しかしその考えも、ドアのカギを慌ただしく空ける音でむなしく打ち砕かれた。

「マサト!!」

女の、上等な赤いコートに包まれた肩が、激しく上下している。

寒くなってきた外の外気のせいか目を見開いたままだったせいか、血走った女の目が、ベットの上の半裸の男と、その傍らに佇むセナを見る。

黒い下着しか身につけていなかったセナは、椅子の背にかけておいた網タイツをはきだす。

その落ち着いた様子が、まるで“私はあなたとは違うのよ”といっているようで、女の神経はさらに逆なでされる。

絶望した女は、バックから、護身用の小さめのナイフを取り出した。

そのナイフを発作的に自分の手首にあてがう。

男とセナの目は女に向けられ、男はなにか言葉を発しようとした。

しかし男が言葉を発する前に、女はナイフを自分にあてがうのをやめ、男を睨みながら、男の方に向かって突進してきた。

セナはその様子を横目で見ながら、急いで洋服を身につけると、はだしのまま部屋を駆けだした。

それに気づいた女が、今度はなにやら叫びながらセナを追ってくる。

セナは下の階にいるエレベーターに悪態をつきながら、非常階段のドアを乱暴に開けた。

半狂乱の女なら、当然非常階段を追ってくると思っていたが、以外にも背後でかちりという鍵をかける音がして、セナははっとした。

以外に冷静じゃない、エレベーターで先回りして、下から追ってくるつもりなのかしら、セナは思った。

エレベーターの動向を見ようと、一階下の非常階段のドアを開けようとしてぞっとした。

鍵がかかっている。

さらにもう一階下も同じだった。

「このマンションは私のものだから」

咲という女は、ゆっくりと階段を上がって来る。

その顔に、勝ち誇ったような敗北に歪んだようないびつな表情を浮かべながら。

セナは女の歩みに合せてゆっくりとおいつめられてゆく。

「いいバッグね」

「は？」

「コートもすてき」

セナはなるべく脅えが顔に出ないように注意して続ける。

「そのバックとコートがあればあんな男いないわよ」

咲は生涯最高の大声を出そうと大きく息を吸いこんだ。

「おまえには関係ねえだろオオオオオ」

ナイフを持った手を大きく振りかぶった次の瞬間、咲の後ろに人影が現れた。

背後からの素早く鋭い一撃で、咲は何が起こったかも理解できないままその場に倒れこんだ。

「危なかったな」

「遅いわよ、令人」

レトロカー・レディN

夜に染まりかけた冬の寒空の下。

トーキョーの街を切り刻むように張り巡らされた高速を走る、レトロカー、レディ・N。

薄藤色^{うすふじいろ}のその車体は、緑のロード・ライトに染まりながら、周りの車をどんどん追い超してゆく。

セナは助手席で体育座りのまま、事務所との連絡用のデバイスを弄んでいる。

さっきまでの自身に満ち溢れたいい女の演技をやめて素の自分に戻ったセナに、網タイツに黒いマイクロミニのドレスといういでたちは、何か違和感を感じさせる。

横でハンドルをにぎる令人は、いわばセナの用心棒だ。

セナをいざという時は身を捨ててでも危険から守る、その役目を令人は実によくこなした。

「東レアルの副社長の娘とヒモ男を別れさせる任務、終了しましたって報告しとくね」

セナは膝の上にデバイスを抱えなおすと、慣れた手つきでそれを作する。

「次の仕事は、連続強盗の手掛かりを掴む」

「手掛かりを掴むって、強盗なんだからとっ捕まえたら駄目なの？」

低い落ち着いた声でそう言うと、令人は車に備え付けられた小さな灰皿に煙草の灰を落とす。

車は、令人がよそ見をして僅かにずれた軌道を自動で修正する。

「うん、調べて報告書を作成って書いてある」

ふーん、令は面白くなさそうに相槌をうつ。

「あつ、でも見て超きれい」

そういうとセナは画像を見せる為にデバイスを令人の方に向ける。

「どれどれ」

そこに映し出された、彫の深い端正に整った顔立ちの女性の画像を見ようと、令人が身を乗り出す。

その瞬間を狙って、セナが令人のくわえていた煙草をぱっと取り上げ、窓から放り投げた。

「あってめエふざけんなよっ」

「だって未成年でしょ」

腕を組み無然とした態度をとるセナを、令人はさらに汚い言葉で罵る。

そのオーバーリアクションな態度に、セナは何か感じたようだ。

令人の左の胸ポケットから、素早く煙草の箱を取りさる。

その煙草の箱には、日本語でも英語でもない文字がびっしり書かれている。

成分の書かれた場所を探していると、令人が箱を奪い返した。

「おかしいと思ってたのよ、給料は一緒の筈なのに令人はいつもお金ないし」

セナが心底悔しそうな顔をする。

「こんな所にお金使ってたなんて」

令人はセナの苦しそうな横顔を見て、どうするべきか迷った。

「まあそんなに怒んなよ」

しかしセナが不意打ちをかけ箱を奪おうとすると、それを鮮やかに片手で制した。

セナはさらにむきになる。

「やめなさいよ！葉^{ヤク}入りのタバコなんか！！」

「おっちょっおまえ危ねえだろ！！」

レトロカーの中はセナのマンションに着くまで、戦場と化した。

セナの部屋

いつしか郊外へと抜け出したレトロカーは、とある高層マンションの地下駐車場へと姿を消した。

やや大きめの車体が停車すると、まだ不機嫌な気分のままのセナが中から出てくる。

セナはいつものように令人に別れの挨拶をするでもなく白い人工鉦石でできたエントランスへと向かう。

「次の標的ターゲットの情報、パソコンに送っとくからな」

レトロカーのスモークガラスが開き、令人がセナの背中に向かい声をかける。

「セナ!!」

呼び止める様な令人の口調にしぶしぶという感じでセナは足を止める。

「生田いくたさんには言うなよ」

“生田”とは、俗に言う凄腕の弁護士であり、二人にとっては命の恩人であり、二人の法律上の保護者でもあった。

セナは何かを言おうとして振り向きかけたが、令人はそれを遮るように車を発進させる。

「じゃなっ!!」

威勢のいいその声がいまいましいとでもいうようにセナは唇を軽く噛んだ。

白いロビーは柔らかな色の光で照らされている。

カードキーをかざすとエレベーターのドアが開き、エレベーターはセナの住む32階へとセナを運ぶ。

部屋のドアは自動ドアだ。

ドアが閉まるとカチリと自動ロックがかかるが、用心の為にセナは手動でロックを二つかける。

部屋は白を基調とした家具が多いが、ブラインドとベットカバーは控えめなピンクだ。

枕元には、いつも枕がわりになってしまう柔らかくて白いぬいぐるみがたくさん。

しかし物が多いとは言えず、生活感はあまりない。

それはセナも令人も余計な物を買う事に慣れていないせいであった。

窓からは夜景が見えるが、今は窓はぴたりとブラインドに覆われている。

セナは、早くさなぎの殻を抜け出したがっている蝶のように、服をあっという間に脱ぎ捨て、急いでシャワールームへ向かった。

お湯につかり、体中ほかほかになった頃には、気分も大分ましになっていた。

冷蔵庫からキンと冷えたレモン・ウォーターを手に取り、ベットの
上にあるキーボードを指でタップすると、半畳程もある壁のパネル
が光りだす。

令人からのデータはもう届いていた。

セナはレモン・ウォーターを飲みながら、それにざっと目を通す。

《依頼主》匿名

《ターゲット》橋本 イース（仮名）

その情報に、セナは特には驚かない。

こういう事はよくある事だ。

それにしても美人ね、セナは思う。

肩の下で切りそろえられた艶やかなブロンズ色の髪。

彫が深く、完璧といってよいほど整った顔立ち。

生意気そうな表情の割には、どちらかという顔の造りは幼い。

この容姿だったら、どんな服をきてどんな髪型をしても、誰もが
“美人”と認めるだろう。

しかしこの美人は自分の美貌を悪用している。

美貌をエサに男性を誘い、隙をついて行われた数々の“泥棒行為”
がずらりと示されていた。

この分だと依頼主は被害者のうちの誰かだろう、セナがそんな事を
ぼんやりと考えていると、突然コールサインが鳴る。

手元のボードに触ると、令人の姿がパネルに映し出される。

「データ、見た？」

画面に映し出された令人は昼間着ていた服のままで、レトルトのパ
スタをほおばっている。

「見たよ。一週間ばれないように監視して、事細かに何をしてるか
報告しろって事だね」

「ストーカーみてえな仕事だな」

確かに令人の言う通りだ、とセナは思った。

絶対にばれないようにやる必要がある。

「飯^{めし}は？」

「ダイエット中」

「食欲ねえんだろ」

「まあね」

分かってるなら聞かないでほしい、セナは心の中で思う。

「ストーカーしてるだけでいいんなら、まあまあ楽な仕事だな。さっさと終わらせて連休取ろうぜ」

「でも格闘技心得ありって書いてあったよ」

そうは言ってみたものの、令人はもちろんセナもあまり心配はしていなかった。

あの体格じゃ格闘技といった所でたかが知れている。

ものすごく着やせするタイプでなければ。

「じゃあ、明日は休みで明後日からストーカー開始、それでいい？」

「うん、いいよ」

「よし、じゃあおやすみ」

おやすみ、と言いながら、令人は通話のスイッチを切らない。

令人がパスタを食べる横顔は上品とは言い難かったが、セナはしばらくぼーっとそれを見つめていた。

令人は通話のスイッチコールを切らないだろう、セナが自ら切るかあるいはセナが眠りにつくかするまでは。

令人はセナの事を良く分かっていた。

なんていったって子供の頃からずっと一緒だったのだから。

令人に甘えるなんて、セナの中ではそんな事はごめん、だった。

しかし咲がナイフを振り上げた時の鬼の形相がよみがえってくるよりはましかもしれない。

そう思い、セナは少しだけ令人に感謝しながらその疲れた体をベツトに預け、やがて眠りについた。

出会い

尾行は、出だしは何の問題もなく順調だった。

ターゲットが現在宿泊しているホテルの情報は事務所から入っていたので、張り込んで彼女が出てくるのを待てば良かった。

橋本イースは夕方になってようやく姿を表し、歓楽街のそばにある一軒のバーに入った。

後はお決まりのパターンだ。

彼女に言い寄ってきた男性と共に、二人はホテルに入っていく、そのほんの僅か後にターゲットだけが出てきた。

おそらく、男性が持っていた金品を持って。

セナと令人は二手に分かれ、令人はイースを追い、セナは被害にあった男性から話を聞こうとしたが、男性は自分の行為を恥じているのか大した事は聞き出せなかった。

ターゲットがホテルに戻ると、令人はホテルの周辺に張り込み、セナはマンションに帰り睡眠をとった。

明け方になると、二人は交代し、今度はセナが張り込んだ。

ホテルの二か所の入口が見張れる場所に、丁度バス停のベンチがあり、都合の良い事にそこから双眼鏡で彼女の部屋も見張れた。

空は白みがかってきたが、まだ朝早い。

イースの部屋のカーテンは閉まったままで、まだ眠っているようだ。冬の朝の冷たい風が容赦なく頬を、耳を、なぐさ 撈る。

少しでもその風から顔を守ろうと、コートに付いたフードを被ろうとした、その時だった。

人の気配などしなかった。

ただ、きんと冷たいナイフの刃先を喉元に感じ、それと同時に、全身を緊張が貫く。

「ハロー、美人さん」

その声は女の声帯から発せられた声だ。

僅かに心に余裕が生まれ、セナは細心の注意を払って、令人にピンチを知らせるブレスレットのボタンを押そうとする。

「よしなよ、ばればれ」

更にナイフが強く喉元に押し付けられ、息をするのすら危うい。

声を上げるなんて、無論無理だ。

頭が次の事を考える間もなく、口と鼻に睡眠薬を含んだガーゼを押し当てられ、セナは意識を失った。

* * *

セナが目を覚ましたのは、薄暗い部屋だった。

閉じられたカーテンの隙間から漏れる日が、まだ日没前だという事を教えてくれる。

強い睡眠薬の副作用か、ズキズキと頭痛がするので、セナはそれをやりすごす為に目を固く瞑らなければならなかった。

「大丈夫？」

やや低めのなめらかな女性の声がする。

声の方に目をやると、見知らぬ人間が立っている。

黒いパーカーにジーンズ、髪はベリーショートで、少年の様な風貌だ。

しかし視界の焦点が合うにつれ、あの整いすぎた顔立ちが目飛び

込んできて、セナは後ろにのけぞった。

後ろにのけぞった拍子にじゅらりと手錠が音をなし、後ろ手に拘束されている事を知る。

体を動かそうとするが、手ばかりでなく足も拘束されている為、ガチャガチャと音をたてるだけで終わった。

セナは椅子に座らされている為、イースを下から睨みつける格好になる。

イースは腕を組み、セナを見下ろしていた。

セナはイースの表情から何かを読み取ろうと、全神経を集中させる。

少なくともイースの顔にサディスティックな笑みは浮かんでいない。

冷静な眼差しだが、どちらかというと少し困惑しているようだ。

セナはそれで若干の落ち着きを取り戻し、部屋を見渡した。

ベットが一つ、部屋の内装からしてどこかの安いビジネスホテルだ。

床にはセナの荷物が散らばっている。

防犯用ブレスレットはご丁寧にばらばらに分解されていた。

先ほどから幾分か時間がたったというのに、イースは口をきかない。

まるで、セナが状況を把握するのを待っているかのように。

「髪、どうしたの？」

セナは沈黙を破ろうと口を開いた。

うかつだ、と後悔しながら。

「君達がつけてくるから、捨てた。あのカツラ」

令人の事も知っている、暗にイースはそう言っている。

「ねー、なんでつけてくるの？嫌いなんだよねー、尾行されるの」

イースはそう言うのと、ベットに座り、靴のままあぐらをかいた。

「説明して、1から10まで」

その言い方に威圧感はない。

喫茶店で会話でもしているような話し方だ。

セナは自分がこんなにも重厚に椅子に拘束された意味について考えた。

やはり力差のない女性どうしだと、用心深くなるのだろうか。

とりあえず、知っている事をすべて話せば、今すぐにでも解放してくれそうな雰囲気だ。

「あなたを尾行するのが私の仕事だったの。探偵の仕事をしている

から、依頼を受けただけ」

「依頼主はだれ？」

「知らない。事務所からは匿名って聞いてた」

イースは少し目を細め、疑わしそうな表情になる。

「ほんとよ、嘘の名前で持ち上げた方がいい？」

少し不満げな表情のまま、イースは質問を続ける。

「事務所の名前は？」

これは言いたくなかったが、偽の名前を言ってなれるのも怖いので、セナは正直に告げる。

イースは小型のパソコンでなにやら調べ始める。

「住所言って」

セナは言われたとおりに答えた。

イースは他にもいくつか質問をし、セナの答えの信憑性を確かめようとする。

その質問に答えている間、セナの頭に一つの考えがよぎる。

「身代金・・・目当て？」

「違うよ、お金はまだあるし」

「じゃあ、すぐ帰してくれるの？」

「質問は、僕の質問が終わってから」

僕、という一人称に若干違和感を抱きながらも、尋問は続く。

「一緒にいた男は誰？」

「仕事仲間。彼も同じ事務所に雇われてる」

「その割には仲良さそうだったねー」

セナは心の中でため息をつく。

観察していたつもりが、気付かぬ間にこんなにも観察されていたとは。

「幼馴染と兄弟の中間位の関係だから」

「彼は今も僕を探してる？」

「多分」

令人はセナを探しているだろう。

しかし場所を特定できるネックレスも、モバイルも、ブレスレットも破壊されているから無理なのだが。

イースはそれを知っているはずだ。

僅かな沈黙ができたので、セナはすかさず口を開く。

「私は仕事をしようとしただけで、あなたになんの恨みもない。この事は事務所に言わないし、私達は今後あなたに一切関わらない事を約束するから・・・」

「から、今すぐ解放しろって？」

イースはベットからぴょんと飛び、窓の方へ向かう。

「それはちよつと虫が良すぎるよ。僕は君達のせいで精神的苦痛を被った訳だし」

セナは愕然とする。

ならいったい何をしろというのだ。

「一つお願いを聞いてくれたら、チャラにしてあげてもいいんだけど・・・」

カーテンの細い隙間から外を覗いていたイースは、くるりとしちらを向く。

「一週間、僕と遊んでくれない？」

セナは意表をつかれ、戸惑う。

この、自分の事を“僕”と呼ぶ美少女と一週間何をするというのだ。

「普通の友達みたいに接して、楽しい時間にして欲しいんだ。一週間は僕との友達ごっこに全神経を集中する事」

それは簡単なようでなかなか難しい、セナは思った。

「嫌だっって言ったら？」

セナはイースの表情を伺いながら聞く。

「いいって言ってくれるまで、鎖外してあげない」

悪意のありそうにない満面の笑みで、イースは悪意のある事を言う。

セナは暫く考える。

「分かった。いいけど、私は無事だっ一言だけ連絡させて」

とたんにイースの表情が曇る。

「駄目だよ、電波から探知されるかもしれないし」

セナが何も言わないでいると、イースが続ける。

「一週間心配し続けた位で人間は死なないから」

死なくとも、胃に穴が空いたりしたら大変じゃない、セナは心の中と思う。

「一週間は事務所の事も相棒の事も忘れる。約束できる？」

セナは渋々うなづく。

従う他はない。

「あ、先に言っとくけど、僕約束破る人は絶対に許さないし、容赦しないから」

一体このイースという人間は何者なのだろう。

セナは手枷と足枷がガチャガチャと開錠される音を複雑な気分で聞きながら思った。

チョコレート

鎖が外され、体が軽くなった瞬間、セナは今まで自分がどれだけ緊張していたかを知る事になる。

急に体が鉛のように重たく感じられ、立ち上がろうとしたものの重力にあがらず、その場に座り込む。

イースはそんなセナを支え、ベットに座らせた。

セナが頭の痛む場所を手でおさえたり押したりしていると、イースが何かを持ってきた。

「これ、拮抗薬。頭痛いの楽になるから」

床に膝をつき、セナを覗き込みながら半分に分った錠剤を一つ差し出す。

まっすぐ見上げてくるイースから目を離さないまま、セナは差し出された物を飲み込んだ。

「少し、寝る？」

イースの質問にセナが軽く頷くと、イースは枕元に行き、布団をベツトから剥がす。

セナは靴だけ脱ぎ、コートを着たまま横になると、布団を鼻の上まで被る。

イースはベッドの端に両腕を置き、顔の上半分だけ覗かせセナを心配そうに見つめていた。

セナはくるりと寝返りをうち、反対側を向く。

急激に眠気が襲ってくるのを感じながら。

まさかまた睡眠薬を飲まされたのではないか、その考えが頭をよぎる。

セナは目覚めた時、また別の場所に移動していない事を願いながら、再び眠りについた。

* * *

今度の目覚めは、前回のより格段にすっきりしていた。

セナはすぐに半身を起こす。

コートも着たまま、靴下もはいたままだ。

おかげで体がほってっている。

「起きた？」

窓辺の小さなソファに座っているイースが声をかけてくる。

新聞を読んでいたようで、それを脇に置く。

しかも英字新聞だ。

イースの目の前のサイドテーブルに、ビニール袋が三つ置かれている。

「お腹すいてない？」

イースは少し楽しそうに、ビニール袋の中身をベットのの上に並べ出した。

袋のなかからはどんどん食べ物が出て来る。

軽く四人前はあるようだ。

「どれが好き？」

多分コンビニで買ってきたのだろう。

パスタばかりが何種類もある。

それから生野菜のサラダ、スナック菓子、チョコレートをイースは得意げに並べる。

「嫌い」

イースは衝撃を受けたようなショックを受けたような表情になりぴたりと固まる。

セナはコンビニのパスタは大嫌いなので、自然に出た言葉だったが、折角なのでイースの反応を観察した。

令人だったら“あっそ、じゃあ食うな”とか言いそうだ。

イースは困ったような悲しいような表情になる。

ベットの上にずらり並べ食べ物を見て、何が悪かったか考えているようでもあった。

二人の間に気まずい沈黙が流れる。

「あ、でもお腹すいてるからこれ貰う」

セナはそう言い、チョコレートをつまみあげる。

イースはそれで満足したようであった。

セナに笑顔を向けながら、ベットの上の他の食べ物を片付けていく。

セナはベットの上でチョコレートを食べながら思った。

このイースという人間は普通じゃない。

セナ達の尾行に気づいた所も、人を拉致するのに慣れている所も、睡眠薬や鎖を常備している所も。

イースの目を盗んで逃げたり、令人に連絡する事は、危険な事だと思えた。

だがしかし、セナは不思議とイースに恐怖心は抱かなかった。

そればかりか、少し親近感に近い物を感じていた。

もしかしたらこれは、見方を変えたなら、隠れず堂々とイースを見張れるチャンスではないか。

何か掴めれば事務所の収入にもなるし、令人にもすぐに連絡しなかった事についてグチグチ言われないかもしれない。

睡眠とチョコレートで元気を取り戻していたセナは、そう考える事にした。

「ねえセナ」

いきなり名前を呼ばれびっくりとする。

何処でセナの名を知ったのだろう。

「僕の名前は知ってるよね？探偵なんだから」

「橋本イース」

知ってるのは仮名だけど、セナは心の中で思う。

イースが本名を言ってくれる淡い期待を抱いたが、それはなかった。

それで満足、とでもいうようにイースはまたにこりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0409z/>

東京2044

2012年1月8日01時49分発行